

The 1st CMU-Osaka Science Mini Symposium

(タイ・チェンマイ大学)に参加して

2017 年 9 月 28 日にタイ・チェンマイ市にある Chiang Mai Orchid Hotel にて, the 1st CMU-Osaka Science Mini Symposium が開催されました. 本シンポジウムはチェンマイ大学と大阪大学の共同開催で, 両大学の紹介と化学系の研究者による発表が行われました. チェンマイ大学があるチェンマイ市へは日本からスワンナプーム国際空港(バンコク)に行き, 国内線で 2 時間ほど移動すると着きます. 標高が高く, タイとミャンマーの国境近くに位置し, 山間部の雄大な自然と仏教関連の施設が多数存在する街です. Chiang Mai Orchid Hotel は, ロビーにタイに関する展示物等がある以外には, 国際会議の会場として一般的な建物でした. 本シンポジウムは大学間交流も兼ねており, 30 – 40 名ほどのチェンマイ大学の学生が講演を聞きに来ていました. 化学専攻からは, 無機化学, 分析化学, 有機化学, 物理化学の各分野の若手研究者が参加し, 物性物理化学研究室からは山下智史助教が参加しました. チェンマイ大学の研究者および関連する研究者の発表は天然物化学に関するものが多く, タイ原産の植物の解析等に関する発表等がありました. その一方で, 低温物性や物理化学的な発表はほとんどありませんでした. シンポジウムが終わった後にはキャンパスツアーおよび研究室紹介が行われました. 主要な研究設備としては NMR や粉末 X 線解析装置, ガスクロマトグラフィーなど分析装置が豊富な反面, DSC や TG-DTA などの熱分析装置や PPMS などの物性測定装置はありませんでした. これは, これらの装置が高価格であることに加えて, 液体窒素や液体ヘリウムの継続的な供給が難しいという点が影響しているようでした.

チェンマイ大学のキャンパスはとても広大で, 大学の正門から建物までの距離が大変長く, 車やバイクで移動する必要がありました. 9 月のタイの気温はおおよそ 30 °C 前後ですが, チェンマイ市の標高は高く紫外線が強いため, 長袖の服装をした人も多く見かけました. キャンパスツアーでは, 大学内にある池の周りの散策などをしたのですが, 池一つとってもスケールが大きく, まるで大阪府にある万博記念公園を観光しているような気分になりました. タイ北部では仏教徒が多く, エクスカーションでは有名な仏教の寺院も観光しました. その際に大学を含むチェンマイ市を一望できる場所がありましたが, チェンマイ大学は自然が多く, 正確な大学の境がどこであるかを区別するのが難しいほどでした. 仏教徒が多いためか, 外国人観光客向けのレストラン以外ではあまり積極的なアルコールの提供は行われておらず, 食事の際の飲料はおおむねミネラルウォーターでした. 今回の滞在では, チェンマイ大学の方が手配した車で移動を行いました. タイでは公共交通機関があまり発達しておらず, モノレールで移動できる場所以外は移動が難儀するといわれるバンコクよりは軽度ということですが, 夕方にはかなりの交通渋滞がありました.

今回のシンポジウムは, 今後大学間交流が活発になれば, 今後も大阪大学もしくはチェンマイ大学で開かれる予定があるということでした. このような機会是他分野に対して物理化学分野の有用性・重要性をアピールできる良い機会であるとともに, 自身にとっても如何にわかりやすい発表を行うかということを考えることができる良い機会でした.

(山下智史)

